# 山梨県における 1920 年恐慌の状況

深澤　竜人

**【要旨】**

第一次世界大戦後に生じた 1920 年恐慌に関して，山梨県での状況を知るべく，各種の統計資料と新聞紙上での史料を基に詳解していった．特に恐慌に至るまでには，山梨県下の主要製品の激しい価格高騰，それをあてにした山梨県下の基幹産業での生産増加，これらが顕著に見られ，逆にそれらが恐慌によって反転崩落し，そして関連産業が瓦解していく状況を詳解した．さらにこの恐慌の後，農村・農家・小作人が経済的な苦境に陥り，ここから農村において小作争議が頻発していく詳しい過程と状況を示した．

**【キーワード】** 1920 年恐慌，第一次世界大戦後恐慌，山梨県，山梨日日新聞，大戦景気

## はじめに

本稿では第一次世界大戦の後に生じた 1920 年恐慌に関して，山梨県下での詳しい状況を知るべく，各種統計資料および新聞紙上から得られた史料を基にして，追究していくものである．この当時の状況に関して全国的なものはいくつか散見されるのだが，一地方・地域としての山梨県下の状況については，あまり先行研究が見当たらない．全国平均的な概説の理解・把握で終わることなく，地方・地域の詳細を明らかにすべきとの筆者・深澤のかねてよりの意向から，上記の課題に迫っていくものである．

## 1．当時の山梨県経済の構造と展開

### 1-1．山梨県経済のマクロ的把握

最初に以下の確認から始めていきたい．まず 1920 年恐慌（第一次世界大戦後恐慌）にまで至る経緯だが，日本経済は 1914 年 7 月から始まった第一次世界大戦によって，「大戦景気」という好景気を経験する．この好景気は過去にないものであり，多くの成金を輩出させたことがよく知られている．こうした全国的な状況は山梨県経済においても大きく変わるものではなかった．（この大戦景気での山梨県の状況は，深澤〔2022b, d〕で詳しく扱っているので参照されたい．）

第一次世界大戦は 1918 年 11 月に終了し，そこで 1919 年は大戦景気からの反動（「休戦反動」）を一時的に受けた．しかしさほど深刻な不景気とはならず，その後は「戦後ブーム」と呼ばれる好景気が再来した．要因としてはヨーロッパの復興に時間がかかり，そこでの復興需要もあり，これらからアメリカ経済の繁栄と需要が旺盛であったこと，対アジア向けの綿布輸出の拡大があったこと，大戦景気で生じた賃金の上昇によって個人消費の拡大が存在したこと，などが指摘されている（橋本〔1985〕415 頁，武田〔2002〕9 頁）．こうして景気は再び過熱していったのであるが，しかしその後の 1920 年に大きな恐慌を迎えるわけである．

このような経緯の下，1920 年の恐慌を経験する前の検討として事前に確認・

把握しておきたいのは，この時期の山梨県経済の大まかな構造把握である．そして第一次世界大戦による大戦景気を経験していく中で，山梨県経済はどのように変化したかである．そこで山梨県経済の構造把握として，以下の表 1・2 で 1910

**表 1　1910 年当時の山梨県経済主要概況**

| 経済指標・統計 | 資料出所 |
|---|---|
| 1. 人口他<br>本籍人 592,776 人，現住人 589,353 人，現住戸数 93,220 戸.<br>生産者（16 歳以上 60 歳未満）323,668 人.（現住人の 54.9%.）<br>不生産者（16 歳未満 60 歳以上）269,108 人. | 『明治四十三年山梨県統計書』57 頁.<br>『同上』71 頁. |
| 2. 農業他<br>農業戸数 74,585 戸（専業 56,905 戸，兼業 17,680 戸）.（1 の現住戸数の 80.0%.）<br>農業人員 354,925 人（専業 284,846 人，兼業 70,079 人）.（1 の現住人の 60.2%.）<br>自・小作人総数 354,925 人.<br>（内訳：自作 95,644 人，自作兼小作 113,649 人，小作 145,632 人） | 『明治四十三年山梨県統計書』83 頁. |
| 3. 工場数<br>工場（職工 10 人以上）合計 201 工.（その内，製糸工場が 135 工.）<br>職工 15,935 人.（その内，製糸工場で 13,696 人.）（1 の現住人の 2.7%）.<br>工場の業種<br>生糸 135 工，玉糸 7 工，甲斐絹 5 工，刻煙草 4 工，レンガ 2 工，新聞 2 工，電気 2 工，マッチ 1 工，清酒 1 工，紡績 1 工，木綿織物 1 工，など．計 201 工. | 『明治四十三年山梨県統計書』187 頁.<br>『同上』188 ～ 201 頁. |
| 4. 株式会社<br>計 39 社.（他に，合資会社 38 社，合名会社 21 社．これらを含めると 98 社．ただし銀行は除く.）<br>資本金額別では，一万円未満 37 社，一万円以上 61 社，（その内，十万円以上 4 社，）<br>合計 98 社. | 『明治四十三年山梨県統計書』162 頁.<br>『同上』163 頁. |
| 5. 商業戸数<br>計 20,336 戸.（代表的なものとして，飲食物 9,297，身飾品 2,610，家具 1,395.）（1 の現住戸数の 21.8%.） | 『明治四十三年山梨県統計書』148 ～ 155 頁. |
| 6. 工業戸数<br>計 19,126 戸.（代表的なものとして，糸及織物に関する職業 8,458．建築に関する職業 5,865，土石木竹皮革に関する職業 2,032.）（1 の現住戸数の 20.5%.） | 『明治四十三年山梨県統計書』178 ～ 185 頁. |
| 7. 銀行他金融業数<br>銀行 68 行．質屋 361 店. | 『明治四十三年山梨県統計書』165，171 頁. |

**表 2　1919 年当時の山梨県経済主要概況**

| 経済指標・統計 | 資料出所 |
|---|---|
| 1. 人口他<br>本籍人 670,644 人，現住人 636,930 人，現住戸数 101,256 戸. | 『第三十七回山梨県統計書』76 頁. |
| 2. 農業他<br>農業戸数 67,316 戸.（1 の現住戸数の 66.5%．その内，自作 15,537 戸，自作兼小作 25,462 戸，小作 26,317 戸.）<br>農業人員 228,028 人.（1 の現住人の 35.8%，その内，自作 53,074 人，自作兼小作 84,418 人，小作 90,536 人.） | 『第三十七回山梨県統計書』136 ～ 137 頁. |
| 3. 工場数<br>工場（職工 10 人以上）合計 196 工.（その内，製糸工場が 141 工.）<br>職工 13,934 人.（1 の現住人の 2.2%，その内，製糸工場で 12,119 人.） | 『第三十七回山梨県統計書』230 頁. |
| 4. 株式会社<br>計 100 社.（他に，合資会社 59 社，合名会社 39 社，株式合資 1 社．これらを含めると 199 社．ただし銀行は除く.）<br>資本金額別では，一万円未満 70 社，一万円以上 129 社，（その内，十万円以上は 21 社,）<br>合計 199 社.<br>会社の種類<br>物品販売業 35 社，生糸製造業 31 社，其他製造業 29 社，金銭貸付業 19 社，委託販売・仲立・市場取引所 18 社，交通運輸業 13 社，など. | 『第三十七回山梨県統計書』271 頁.<br>『同上』280 頁.<br><br><br><br>『同上』280 頁. |
| 表 1 にあたる 5 ～ 6 は記載なし. | |
| 7. 銀行他金融業数<br>銀行 61 行. | 『第三十七回山梨県統計書』282 頁. |

年当時の状況と 1920 年恐慌が発生する直前の 1919 年の状況を，それぞれ取ってみた．両者を比較し確認していくと，以下のことが把握できてくる．

この当時，つまり 1910 年から 1919 年の 10 年間にかけての山梨県経済を，おおまかにマクロ的に把握し，さらにその推移を確認していくわけだが，表 1・2 によって以下のことが明確となってくる．人口は約 59 万人から約 64 万人へと 5 万人の増加．戸数も約 1 万の増加．1919 年時点で戸数の 6 ～ 7 割は農業である．ただ 1910 年から 1919 年を比較すると，農家の割合は全体の中で戸数では約 80%

**表 3　山梨県の自作・小作の比率（%）**

| 年 | 人 | | | 土地 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 自作 | 自小作 | 小作 | 自作 | 小作 | 自小作 |
| 1885 | 28.9 | 41.3 | 29.9 | 52.1 | 47.9 | |
| 1890 | 24.9 | 42.5 | 32.6 | 50.2 | 49.8 | |
| 1895 | 25.9 | 36.5 | 37.6 | 30.9 | 34.2 | 34.9 |
| 1900 | 25.6 | 37.0 | 37.5 | 35.3 | 32.8 | 31.9 |
| 1905 | 25.7 | 35.2 | 39.1 | | | |
| 1906 | 25.6 | 35.9 | 38.5 | 43.3 | 56.7 | |
| 1907 | 28.1 | 30.7 | 41.2 | 44.5 | 55.5 | |
| 1908 | 26.1 | 31.3 | 42.6 | 44.5 | 55.5 | |
| 1909 | 27.6 | 30.4 | 42.0 | 44.1 | 55.9 | |
| 1910 | 26.1 | 31.6 | 42.3 | 45.4 | 54.6 | |
| 1911 | 25.1 | 34.7 | 40.2 | 44.5 | 55.5 | |
| 1912 | 24.7 | 35.0 | 40.3 | 45.5 | 54.5 | |
| 1913 | 24.9 | 34.4 | 40.6 | 44.8 | 55.2 | |
| 1914 | 23.4 | 36.2 | 40.4 | 45.1 | 54.9 | |
| 1915 | 22.8 | 35.4 | 41.7 | 45.8 | 54.2 | |
| 1916 | 23.5 | 36.7 | 39.8 | 46.3 | 53.7 | |
| 1917 | 23.5 | 37.1 | 39.4 | 46.0 | 54.0 | |
| 1918 | 23.7 | 37.4 | 38.9 | 44.6 | 55.4 | |
| 1919 | 23.3 | 37.0 | 39.7 | 45.0 | 55.0 | |
| 1920 | 23.8 | 37.3 | 38.9 | 44.9 | 55.1 | |
| 1921 | 21.9 | 38.4 | 38.7 | 45.3 | 54.7 | |
| 1922 | | | | | | |
| 1923 | 25.1 | 38.8 | 36.1 | 45.6 | 54.1 | |
| 1924 | 25.6 | 38.9 | 35.5 | 45.6 | 54.4 | |
| 1925 | 25.5 | 38.5 | 36.0 | 46.0 | 54.4 | |
| 1926 | 24.1 | 40.1 | 35.8 | 46.5 | 53.5 | |

資料出所：『山梨県統計書』各年版より算出．空欄は統計なし．統計上，接続しない年もあるが，1906 年からは接続している．

から 67% に減少．同じく農業人員は 35 万人から 23 万人へとかなり減少している．農家・農村ではこの時期においても従来の地主・小作関係が存在していた（表 3 を参照）．だが 1910 年代の特徴としては自作・小作農が減少し，代わって自小作農の比率が増加している点である．この点に関しては深澤（2022b）にて詳解したが，本稿でも後に関連する限りで触れていく．

表1・2に戻って工場を見ていくと，数自体は1910年の201工から1920年の196工と，大きな変化はない．それぞれ約4分の3が製糸工場である．第一次世界大戦後は日本経済において重化学工業化が展開してきたと一般的に言われているが，山梨県においてはそうした展開は見られていない．専らが軽工業としての製糸工場である．ただその製糸工場で働く労働者は，約1万4千人から約1万2千人に減少している．幾分の減少が見られるのは，山梨県外に出稼ぎに出る者が増えたことからであろう．ただ山梨県内の製糸業はこの時期，従来の座繰製糸などの手作業・マニュファクチュア的なものから，それよりも大型・大規模で大量生産的な器械製糸への転換，そして原動力としては水力・蒸気力から徐々に電力へと転換しつつあった（『山梨県統計書』1920年版，212～233頁）．

銀行を除いた会社数は，同期間中約100社から200社に倍増．そして1919年になると，資本金が10万円以上という比較的大きな会社の数が増加している．銀行は68行から61行に減少．1910年には質屋の数が多かったのだが，1919年にはその数は明らかでない．

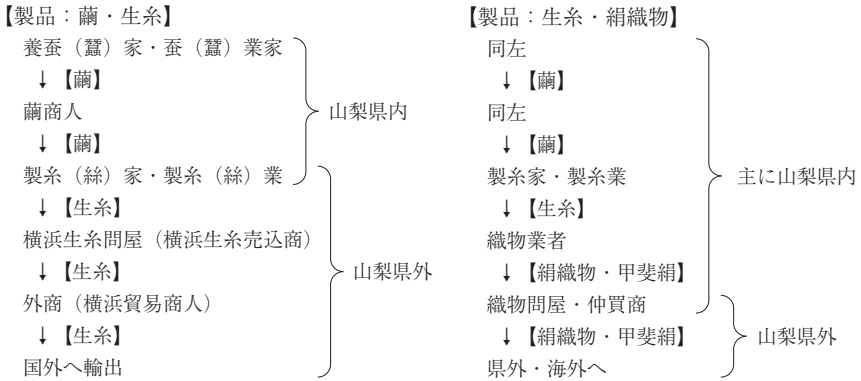
## 1-2．農業と主要産業の詳細

明治期以来，山梨県ではこのように戸数の6～7割は農家であり，農業を主体とするものであった．そこでこの当時の農家・農業の主要な特徴としては，現在と比較して著しい低生産性・低収益性・零細性である．これと同時に既述のような地主・小作関係が存在していた．そしてこうした農家・農業の低生産性・低収益性・零細性を補うために，零細的な農家，あるいはそうでなくとも農村の多くの農家では，現金収入を得るべく養蚕業を行なって繭を出荷し，あるいは子女を女工として生糸工場に，県の内外を問わず出稼ぎに出していたわけである．農家・農村の低生産性・低収益性，付随する地主・小作の関係，（つまりは小作人側の地主への高額な小作料の負担，）そこからもたらされる小作農の零細性，これを補う養蚕業や女工の出稼ぎ，こうした一連の関連がこの当時の農家・農業の主要な特徴である[1]．

[1] これらに関しては特に深澤（2022b）を参照．また明治40年（1907年）前後での同様な分析としては，深澤（2018a, 2021c, d）を参照．これらの論稿によっても本稿と

このような農業・農村に基盤を置いた山梨県の産業から，当時の主要な製品を見ていくと以下のとおりである．農家・農村からは米，繭が生産され，その繭は製糸工場にて女工の労働によって生糸にされていた．そしてこの生糸を利用して，山梨県では甲斐絹（かいき）と呼ばれる絹織物が織物業者によって生産されていく．これらの製品・工程・流通ルートを図で示すとすれば以下のようになる．

**繭・生糸，絹織物の製品工程と流通ルートの図**




資料出所：深澤（2021d）123 頁．

およそこのような製品とその生産が，山梨県における明治期以来の主要産業・基幹産業であった．ただそれらの製品の最終的な需要・消費先は図で確認できるように，県外・国外である．そのため，県外・国外での景気や需要に大きく左右され影響されるのが常であった．そしてまた最終的な需要・消費先までにはこのように様々な売買ルートがあったことから，このルートの各所でいわゆる架空の需要や，それに伴う価格の変動が大きくが生じることとも常であった．つまり各所において思惑的な需要が生じたり，そこから派生する生産と供給あるいは滞貨の変化と増減，これらに対応するべく価格での調整，そこから乗じる価格の乱高

共通した状況や，当時の農家・農民の低生産性と零細性などが明確に知れる．

下，さらにはそれらを見込んでの投機的な取引と，これらが多分に生じていたのである．

このことは本稿で対象としている1920年恐慌以前の場合（1890年恐慌，1897-98年の日清戦争後第一次恐慌，1900-01年の日清戦争後第二次恐慌，1907年の日露戦争後恐慌）でも同様であったのだが（深澤〔2017a, b, 2018a, b, 2019a, 2020, 2021d〕参照）．しかしそれら過去の教訓は，この1920年の恐慌時にも活かせなかったわけである．以下でその詳細を見ていくこととなる．

## 2．好景気の構図と恐慌にまで至る状況

### 2-1．戦後ブームの状況

このような山梨県経済の構造を把握した上で，では1920年の恐慌に先立つ第一次世界大戦後ブーム（戦後ブーム）とは，本稿対象の山梨県経済においてどのようなものであったのであろうか．その状況に関して以下確認していきたい．（「大戦景気」での山梨県の状況は，深澤〔2022b, d〕で詳しく扱っているので参照されたい．）

既にここまでの把握・確認から解るように，上記1-1で触れた大戦景気・戦後ブームは，基本的には1-2で指摘した繭・生糸・絹織物（甲斐絹）に対する他県・他国からの需要拡大，そして山梨県内での生産拡大，加えてそれらの価格の高騰によってもたらされたものである．当時の山梨県経済は1-1で把握したように農業を中心とした産業構造であり，そこから産出されてくる主要産業・基幹産業が1-2で見たとおりであるから，つまり繭・生糸・絹織物（甲斐絹）といった主要製品の需要拡大や価格の上昇，これが生ずればそこでの利得目当てに生産拡大が行なわれる．それによってこれら主要産業・基幹産業には，収益・所得の増加・上昇がもたらされる．そしてこれら主要産業・基幹産業の収益・所得の増加・上昇は，他の産業の需要・消費・生産の拡大と，これらを通じて県下での全体的な景気の波及と上昇効果をもたらしていく．こうした連関と因果関係にあったのである．零細的な農家・農村でも繭や米の販売価格の上昇，そして製糸業での女工の所得上昇によって，好景気時には零細性をある程度ぬぐうことができたわけで

ある．

**①好景気の状況，商況の良さ，成金の跋扈**

こうした好景気の要因と構図は，何も今回の第一次世界大戦の大戦景気やその後の戦後ブームに限ったことではなく，山梨県において過去これまで何度か生じた好景気と同様なものであった．ただ今回の大戦景気・戦後ブームは山梨県経済において過去にないほどのものであったのである．その状況について確認していくとして，まず戦後ブーム，当時の好景気，商況の良さ，成金の跋扈，これらについて当時の新聞紙上では次のような指摘がなされている[2]．

> 金の費途に困る／郡内方面は殊に好景気／農村奢侈の風益々甚し
> 米は高く売れる、生糸も値がいいので繭も思つたより高く売れる、何も彼も生産品がドシ［ドシ］高く売れるので一般に農村は金廻りが豊で　極少数の一部を除いては此新春を迎ふるに苦しい算段をしたなどといふ話は聞かない、否農村地方では有り余る金を如何にして費消せんかといふ事に就て却つて苦心して居るかの如く見える、殊に南北都留両郡下所謂郡内方面は甲斐絹が無前の高値を示すと共にドシ［ドシ］力職機を備へ付けて生産の増加を図つた結果　機業家の懐合ひは大福々の有様であるから　之が一般に湿ほうて自然何処も彼処も大成金小成金がうよ［うよ］して居る有様であるから、谷村町あたりの商家も従つて景気よく、何でも値の高いものがドシ［ドシ］売れて行くといふ奇現象をさへ生ずるに至つた　［以下略］（『山梨日日新聞』1920 年１月８日.）

> 甲府に於ける新年風俗／大分変つて来た／好景気の影響
> ［前略］　尚ほ帰省中の製糸工女達の風俗が一変して　少くも銘仙位からお召

[2] 以下の引用に当たっては，旧漢字体を当用漢字体に改めた個所がある．原文には漢字に振り仮名や，大文字・小文字の違いがあるが，それは省略した．また，原文の平仮名には濁点があるものとないものがあるが，原文のままとしてある．なお，読みやすさを考えて，引用上一マス開けた個所もある．

縮緬だの半ゴートなどを来て居るから　何家の令嬢かと思はせるやうな成金振りで娯楽業や飲食店でパツパと金びらを切つたのは春らしくて景気もよいが　又之等の成金工女をモノにせよう云ふ狼連の不良輩が付き纏ふのも多い、之は新年の風俗として余り嬉くない現象である　(『山梨日日新聞』1920年1月14日.)

このように山梨県の郡内・国中を問わず，大戦景気から続いた好景気ぶりが戦後ブームとして,1920年初めにおいても確認できるのである．その要因としては，上記で指摘したような，また既に本稿1-1・2で確認したような，農村からの米・繭の販売価格の上昇，絹織物（甲斐絹）の高騰と生産増加，製糸女工の賃金増加，これらが明らかに見られるわけである．

こうした好況は続いて後の史料からも確認できるとして，この第一次世界大戦景気・戦後ブームで特徴的なのは，この期間中過去にないほど価格が高騰した点である．これが今回の好景気の何よりの特徴である．先に今回の大戦景気・戦後ブームは山梨県経済において過去にないほどのもの，このように筆者・深澤が言及した内奥には，こうした価格の高騰ぶりがすさまじかったという事象が見て取れるからである．ではその価格面での状況に関して確認していこう．

**②繭・生糸・甲斐絹価格の上昇・高騰**

表4・5において甲府市と谷村町の物価で主だったものを掲載した[3]．第一次世界大戦は1914年から始まり，1918年に終わる．この間，好景気ほかによって諸物価が高騰した．その後1919年の7・8月に全国的に米騒動が発生し，山梨県でも類似の事件が生じている（深澤〔2022d〕）．この米騒動の要因は米価の高騰であった．よって米をはじめとして，日用の生活必需品等々の価格，いわゆる諸物価が1919年までにかけて上昇しているのが解る．

---

[3] 齋藤・尾関(2004)では,当期の村是調査(中込〔1915〕・山梨県中巨摩郡豊村役場〔1914〕)に基づいて，農家がどのような品目をどの程度購入していたのかが明らかにされている．そうした生活必需品やまたそれ以外の品目に関して，甲府市・谷村町の物価の趨勢を表4・5に示した．

**表 4　甲府市の物価（円）**

| 年 | 米（上, 一石） | 牛乳（一升） | 和赤砂糖（百斤） | 紡績綿糸（百斤） | 繭（一石） | 生糸（上, 百斤） | 甲斐絹（一反） | 石炭（一噸） | 薪（十貫目） | 食塩（一叺, 四十斤入） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1905 | 13.75 | 50.0 | 15.00 | 41.60 | 55.00 | 965.75 | | 4.75 | 25.00 | |
| 1906 | 18.63 | 0.50 | 14.00 | 38.41 | 52.60 | 1,000.00 | | 4.90 | 0.25 | |
| 1907 | 20.50 | 0.50 | 14.38 | 38.63 | 50.63 | 1,150.00 | | 5.25 | 0.30 | |
| 1908 | 19.32 | 0.50 | 15.00 | 38.50 | 45.00 | 895.00 | | 5.40 | 0.29 | |
| 1909 | 16.68 | 0.50 | 14.70 | 40.25 | 43.25 | 987.50 | | 3.25 | 0.30 | |
| 1910 | 16.93 | 0.55 | 14.50 | 33.38 | 41.50 | 925.00 | | 10.85 | 0.39 | |
| 1911 | 20.55 | 0.50 | 16.31 | 33.20 | 39.25 | 892.50 | | 9.43 | 0.36 | |
| 1912 | 25.78 | 0.50 | 17.65 | 40.66 | 42.75 | 900.00 | | 8.00 | 0.44 | |
| 1913 | 25.63 | 0.45 | 17.46 | 34.45 | 51.75 | 951.25 | | 9.93 | 0.42 | |
| 1914 | 18.52 | 0.40 | 14.83 | 37.02 | 47.00 | 921.50 | | 8.71 | 0.45 | |
| 1915 | 14.70 | 0.40 | 18.25 | 101.25 | 42.50 | 887.50 | 5.55 | 8.50 | 0.44 | 0.95 |
| 1916 | 16.48 | 0.40 | 22.00 | 123.30 | 71.00 | 1,337.50 | 5.13 | 10.53 | 0.48 | 0.97 |
| 1917 | 25.13 | 0.48 | 27.75 | 165.00 | 73.75 | 1,522.50 | 6.90 | 17.75 | 0.62 | 1.08 |
| 1918 | 36.50 | 0.60 | 25.50 | 113.15 | 67.50 | 1,515.00 | 8.69 | 25.29 | 0.80 | 1.26 |
| 1919 | 49.13 | 0.80 | 43.00 | 139.20 | 126.50 | 2,330.00 | 11.50 | 46.48 | 1.34 | 1.43 |
| 1920 | 39.63 | 1.20 | 45.00 | 127.75 | 90.33 | 2,265.00 | 11.00 | 30.50 | 1.65 | 1.90 |
| 3 月 | 55.00 | 1.20 | 50.00 | 148.00 | 180.00 | 3,800.00 | 13.00 | 30.40 | 1.80 | 1.50 |
| 6 月 | 38.00 | 1.20 | 56.00 | 132.00 | 90.00 | 1,750.00 | 11.00 | 30.40 | 1.80 | 2.40 |
| 9 月 | 36.00 | 1.20 | 42.00 | 127.00 | 31.30 | 1,270.00 | 11.00 | 30.40 | 1.60 | 1.90 |
| 12 月 | 29.50 | 1.20 | 32.00 | 104.00 | 60.00 | 1,500.00 | 9.00 | 30.80 | 1.40 | 1.79 |
| 1921 | 32.50 | 1.05 | 27.00 | 117.50 | 75.25 | 1,750.00 | 8.50 | 28.25 | 1.30 | 2.01 |
| 3 月 | 26.50 | 1.10 | 32.00 | 138.00 | 67.00 | 1,600.00 | 8.00 | 31.00 | 1.30 | 2.22 |
| 6 月 | 28.00 | 1.10 | 26.00 | 143.00 | 67.00 | 1,680.00 | 8.00 | 30.00 | 1.30 | 2.00 |
| 9 月 | 36.50 | 1.10 | 28.00 | 103.00 | 70.00 | 1,620.00 | 8.50 | 25.00 | 1.30 | 1.97 |
| 12 月 | 39.00 | 0.90 | 22.00 | 86.00 | 97.00 | 2,100.00 | 9.50 | 27.00 | 1.30 | 1.86 |

資料出所：『山梨県統計書』各年版．空欄は記載なし．

ここまでは想定できようが，着目すべきは先に確認把握した山梨県下の基幹産業の主要製品，つまり繭・生糸・甲斐絹，そして米，これらの価格は 1919 年で収まらず，1920 年の 3 月にかけて恐ろしいまでに上昇・高騰しているのである．例えば米の価格は，米騒動が生じた 1919 年の直後も甲府・谷村ともに低下しておらず，低下し出すのは 1920 年の 9 月以降である．（1920 年は未曽有の豊作であったことが一つの要因である．）繭・生糸・甲斐絹も同様であって，著しいの

**表 5　谷村町の物価（円）**

| 年 | 米（上, 一石） | 牛乳（一升） | 和赤砂糖（百斤） | 紡績綿糸（百斤） | 繭（一石） | 生糸（上, 百斤） | 甲斐絹（一反） | 石炭（一頓） | 薪（十貫目） | 食塩（一叺, 四十斤入） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1905 | 14.83 | 0.49 | 15.75 | 39.50 | 42.50 | 839.00 | 4.39 | | 0.55 | 6.88 |
| 1906 | 16.25 | 0.48 | 16.00 | 40.00 | 55.00 | 775.00 | 5.98 | | 0.14 | 8.00 |
| 1907 | 13.70 | 0.45 | 15.25 | 40.00 | 50.00 | 1,717.50 | 5.63 | | 0.15 | 8.00 |
| 1908 | 17.45 | 0.45 | | 33.62 | 45.66 | 913.75 | 4.58 | | 0.20 | 7.00 |
| 1909 | 15.58 | 0.45 | | 33.00 | 42.00 | 797.50 | 3.75 | | 0.20 | 7.00 |
| 1910 | 14.58 | 0.45 | 16.00 | 33.00 | 35.75 | 785.00 | 3.50 | | 0.25 | 7.00 |
| 1911 | 17.63 | 0.44 | 12.95 | 41.00 | 42.75 | 869.50 | 4.43 | | 0.20 | 5.75 |
| 1912 | 25.15 | 0.45 | 13.00 | 42.00 | 38.00 | 857.56 | 4.55 | | 0.21 | 5.75 |
| 1913 | 25.00 | 0.38 | 15.50 | 42.00 | 43.63 | 932.50 | 4.30 | | 0.25 | 5.65 |
| 1914 | 17.00 | 0.40 | 19.88 | 38.25 | 41.67 | 898.30 | 3.58 | | 0.30 | 5.00 |
| 1915 | 13.30 | 0.30 | 19.95 | 35.00 | 37.66 | 854.57 | 4.19 | | 0.30 | 4.38 |
| 1916 | 15.13 | 0.40 | 21.88 | 44.30 | 50.00 | 1,234.83 | 4.65 | | 0.63 | 4.75 |
| 1917 | 19.63 | 0.35 | 23.45 | 72.70 | 69.33 | 1,387.50 | 6.64 | | 0.39 | 5.75 |
| 1918 | 34.50 | 0.55 | 25.63 | 132.50 | 87.50 | 1,622.50 | 8.81 | | 0.49 | 6.50 |
| 1919 | 34.80 | 0.75 | 31.70 | 90.80 | 143.33 | 2,578.50 | 11.44 | | 0.70 | 6.70 |
| 1920 | 38.65 | 0.88 | 37.63 | 146.75 | 94.75 | 1,825.00 | 8.50 | | 0.85 | 16.00 |
| 3 月 | 51.10 | | | | 170.00 | 3,400.00 | 12.00 | | 0.80 | 14.00 |
| 6 月 | 45.50 | | | | 69.00 | 1,700.00 | | | 0.70 | 14.00 |
| 9 月 | 30.00 | | | | 70.00 | 1,100.00 | 6.00 | | 0.90 | 20.00 |
| 12 月 | 28.00 | | | | 70.00 | 1,100.00 | 7.50 | | 1.00 | 16.00 |
| 1921 | 33.65 | 1.00 | 24.00 | 130.00 | 70.00 | 1,462.50 | 8.13 | | 0.9 | 12.50 |
| 3 月 | 30.00 | 1.00 | 27.00 | 128.00 | 80.00 | 1,400.00 | 6.50 | | 1.00 | 12.50 |
| 6 月 | 30.00 | 1.00 | 27.00 | 135.00 | 60.00 | 1,250.00 | 8.00 | | 1.00 | 12.40 |
| 9 月 | 37.30 | 1.00 | 21.00 | 135.00 | 70.00 | 1,600.00 | 9.00 | | 0.80 | |
| 12 月 | 37.30 | 1.00 | 21.00 | 135.00 | 70.00 | 1,600.00 | 9.00 | | 0.80 | |

資料出所：『山梨県統計書』各年版．空欄は記載なし．

は繭と生糸価格の上昇である．これらは第一次世界大戦が始まった頃から 1920 年の 3 月にかけて，およそ 4 ～ 5 倍の価格の上昇を示している．

ちなみに 1907 年に日露戦争後の恐慌が生じるその前段階の年，1905-06 年に日露戦争後好況となって景気が良く，生糸が高値で取り引きされた．それと比較していかに第一次世界大戦での大戦景気，その後の戦後ブームでの価格の高等ぶりはすさまじいものであったのかが，表 4・5 から解るのである．

**③基幹産業での生産の増加**

こうした基幹産業の主要製品（繭・生糸・甲斐絹）の価格の高騰ぶりを背景に，またそれによる収益の増加を見込んで，これらの産業では生産の増加を行なっていったわけである．このことに関してまず設備投資の拡大について，絹織物での力職機の設置に関する史料として，以下の記事からその状況を確認できる．

> 好況と投資
> 時局以来三年間は経済界の好況に伴ひ郡内機業も頗る活気を呈し　織物価格の騰貴と共に多大の収益ありし結果　最近力職機を以て経営する者は其の収益の大部分を機台据付の為めに投資し　大正七年［1918 年］末一千台の力職機は漸次増加して　昨年［1919 年］末には二千台を算するに至り　［以下略］
> （『山梨日日新聞』1920 年 5 月 22 日.）

このように収益の大部分を機台に投資している状況だったそうである．であれば，力職機の数は上史料から倍ほどになり，（農家・農村での力職機設置の状況は本稿 2-2 で引続き示されていく，）これによって当然絹織物・甲斐絹の生産量が増加する．いわゆる設備投資・資本蓄積による拡大再生産の展開である．そうした生産量の増加を次に見ていくとして，次・次々頁の表 6・7 で米・繭・蚕糸（分類として生糸のほか屑糸を含む）・絹織物の生産量ほかを示した．米の収穫量をいきなり上昇させることは不可能であるが，その他の繭・蚕糸・絹織物の産出量，そしてその価額は，1919 年にかけて著しく増加していることがそれらの表からも知れてくる．

このように山梨県の主要製品であった繭・生糸（蚕糸）・絹織物，これらの産出量はかくの如く増加していったのである．加えて，上記②で把握したようにそれらの主要製品の価格は上昇していたから，それらの産出価額も既述のとおり増加したのである．これによって関係当該者の所得は上昇し，上記①で確認したような過去にないほどの大戦景気・戦後ブームが，山梨県経済において到来し，その好景気ぶりに関係者は①のように酔いしれたわけである．

**表 6　米・繭の生産ほか**

| 年 | 米 | | | | 繭 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 作付反別（町） | 収穫高（石） | 収穫価額（円） | 一石あたりの収穫価額（円） | 養蚕延べ戸数（戸） | 数量（石） | 価　額（円） | 一石あたりの価額（円） |
| 1905 | 20,027.5 | 287,977 | 4,459,074 | 15.5 | 85,656 | 81,729 | 3,447,599 | 42.6 |
| 1906 | 19,751.1 | 303,370 | 4,671,928 | 15.4 | 86,317 | 104,574 | 5,360,058 | 51.3 |
| 1907 | 20,023.3 | 300,889 | 4,980,958 | 16.6 | 90,922 | 113,458 | 6,486,109 | 57.2 |
| 1908 | 18,165.2 | 263,231 | 3,863,736 | 14.7 | 88,725 | 106,385 | 4,337,629 | 40.8 |
| 1909 | 18,576.4 | 387,553 | 4,348,030 | 11.2 | 93,194 | 113,662 | 4,846,726 | 42.6 |
| 1910 | 18,564.3 | 259,711 | 3,789,675 | 14.6 | 96,860 | 121,752 | 4,607,504 | 37.8 |
| 1911 | 18,649.2 | 339,365 | 5,520,474 | 16.3 | 97,843 | 132,259 | 5,370,468 | 40.6 |
| 1912 | 18,941.8 | 372,942 | 7,820,542 | 21.0 | 99,526 | 140,190 | 5,725,452 | 40.8 |
| 1913 | 19,180.2 | 327,418 | 6,859,279 | 20.9 | 101,178 | 146,176 | 6,617,375 | 45.3 |
| 1914 | 19,531.4 | 431,077 | 5,104,553 | 11.8 | 102,736 | 140,584 | 6,087,622 | 43.3 |
| 1915 | 19,634.9 | 396,086 | 5,206,721 | 13.1 | 103,158 | 152,821 | 5,672,275 | 37.1 |
| 1916 | 19,657.4 | 409,656 | 6,665,115 | 16.3 | 107,409 | 191,811 | 9,948,358 | 51.9 |
| 1917 | 19,685.6 | 377,660 | 8,407,688 | 22.3 | 110,583 | 208,646 | 14,249,432 | 68.3 |
| 1918 | 19,709.0 | 451,529 | 16,499,276 | 36.5 | 111,186 | 220,678 | 18,313,088 | 83.0 |
| 1919 | 19,818.6 | 401,890 | 21,283,562 | 53.0 | 113,784 | 227,682 | 24,981,720 | 109.7 |
| 1920 | 19,756.0 | 438,689 | 11,095,603 | 25.3 | 111,342 | 188,018 | 11,961,459 | 63.6 |
| 1921 | 19,937.1 | 361,189 | 13,702,388 | 37.9 | 109,886 | 203,603 | 13,893,178 | 68.2 |

資料出所：深澤〔2018b〕9 頁．原史料は『山梨県統計書』1913 年版であったが，後の史料によって誤記を修正した．「一石あたりの収穫価額・価額」は筆者が算出した．

## 2-2．恐慌にまで至る状況

ただこうした好景気は良いとしても，景気が過熱していくにつれて，今までの好景気を基にまた今後のさらなる発展を見込んで，一層熱狂的な利得目当ての活動・行動が現れてくるのが常である．単純な設備投資というよりも，いわゆる投機活動の発生であって，こちらの方は恐慌の発生後に回顧した場合，問題行動となっていく．以下その状況を確認・把握していく．

**表 7　蚕糸・絹織物の生産ほか**

| 年 | 蚕糸 | | | 絹織物 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 数量（貫） | 価額（円） | 一貫あたりの価額（円） | 数量（反） | 価額（円） | 一反あたりの価額（円） |
| 1905 | 161,561 | 8,360,306 | 51.7 | 663,951 | 2,490,751 | 3.8 |
| 1906 | 155,434 | 8,580,261 | 55.2 | 636,201 | 2,701,887 | 4.2 |
| 1907 | 206,382 | 11,265,589 | 54.6 | 788,934 | 3,933,179 | 5.0 |
| 1908 | 211,273 | 9,933,743 | 47.0 | 965,396 | 4,366,395 | 4.5 |
| 1909 | 212,304 | 8,511,864 | 40.1 | 1,051,078 | 4,245,948 | 4.0 |
| 1910 | 253,316 | 9,449,616 | 37.3 | 1,101,476 | 4,376,959 | 4.0 |
| 1911 | 256,448 | 9,330,316 | 36.4 | 1,069,726 | 4,573,263 | 4.3 |
| 1912 | 276,700 | 11,131,499 | 40.2 | 1,134,028 | 4,957,444 | 4.4 |
| 1913 | 258,331 | 11,073,213 | 42.9 | 1,134,674 | 4,768,922 | 4.2 |
| 1914 | 242,172 | 9,128,210 | 37.7 | 908,448 | 3,746,834 | 4.1 |
| 1915 | 249,554 | 10,168,487 | 40.7 | 828,517 | 4,234,945 | 5.1 |
| 1916 | 286,693 | 15,865,870 | 59.0 | 827,762 | 3,933,786 | 4.8 |
| 1917 | 328,345 | 20,702,604 | 63.1 | 790,664 | 5,097,906 | 6.4 |
| 1918 | 328,331 | 24,184,124 | 73.7 | 1,327,850 | 11,607,744 | 8.7 |
| 1919 | 388,493 | 44,831,123 | 115.4 | 1,931,222 | 25,267,744 | 13.1 |
| 1920 | 384,017 | 31,769,986 | 82.7 | 56,608 | 282,095 | 5.0 |
| 1921 | 377,934 | 28,513,545 | 75.4 | 2,335,121 | 23,927,848 | 10.2 |

資料出所：『山梨県統計書』各年版．絹織物の 1920 年の数値は．「一石あたりの収穫価額・価額」は筆者が算出した．

この当時の山梨県経済は農村主体の経済構造であると 1 で把握確認したが，2-1 で見てきたような好景気によって，裕福な地主や農家は株を買っていたし（『山梨日日新聞』1920 年 3 月 19 日，8 月 7 日），さらにそうでない農民・農家でも，上記のような今までの好景気を基にまた今後のさらなる発展を見込んで，先祖伝来の土地を売り払い，力職機を購入して絹織物の製造を自宅で行ない出したのである．こうした状況は新聞記事で多々紹介されている．以下，一例を示そう．

［前略］　郡内方面のの農家では甲斐絹の好況に促されて機業熱が高くなり近隣の収益に垂涎して先祖伝来の田地田畑を二束三文で売り払ひ　忽ち力職機などを据え付けて馴ぬ仕事に手を出した所　僥倖にも相場に援けられ　今日は一日何百円の収入があつた　明日は又此何倍の金が懐中へ転び込むなぞと黄金冷えのするやうな夢を実際に見たから堪らない　［以下略］（『山梨日日新聞』1920年2月16日.）

南北都留郡下の生命ともいふべき甲斐絹は一時経済界の好況に乗じて価格も漸次昂騰して機業家はメキ［メキ］と利益を見るやうになり　其の結果として所謂機屋成金が続出するに至つた為め　同地方の人々の中には祖先伝来の農業や商業や製炭業を打ち捨てゝ我も我もと機屋になり　力職機を据えつけて盛んに甲斐絹を製造したものであつた、それが又戦争の影響を受けて思つた通りドシ［ドシ］儲かつて行くので　愈々山の中に狸や猿を相手に黒くなつて働くのは馬鹿らしいと　益々機業熱を盛んにならしむる傾向を生ずると共に奢侈の風が瀰漫し　どんな山の中へ入つても絹ぐるみの衣類を纏ひ、金時計、金指輪、金歯、といふやうに金づくめになつて　夜は青楼に酒を酌み妓に戯れて他を顧みざる状態であつた、尤もこれは必ずしも郡内許りでなく地方農村全部に至つて斯かる傾向を生じて来たのであるが　［以下略］（『山梨日日新聞』1920年4月10日.）

このように今まで示してきた機業熱，生産の増加，価格の高騰，成金の叢生，奢侈の流行，これらが一体となっており，それが山梨県という一地方の農村においても把握できるのである．

それにしても，繭にしろ，生糸にしろ，甲斐絹にせよ，表4・5ほかで確認する限りでも，あまりにも高騰していた．後の1980年代後半の日本経済全般に生じたバブルの時の土地価格の高騰のように，適正価格を超えて多分に投機的な取引を交えた異常な価格の高騰は，やがてはいつか崩壊するのが常である．それが今回は1920年の3月に大暴落を伴って生じていくのであって，これが第一次世界大戦後恐慌・1920年恐慌となっていくわけである．ではその状況に関して，

節を改めて確認していきたい.

## 3. 恐慌の発生と山梨県での展開

### 3-1. 恐慌の発生

1920 年恐慌の発生は一般的には 1920 年 3 月 15 日に東京株式市場で株価が大暴落したこと，これが恐慌の発生であって，この後の恐慌展開の発端とされている．この見解について筆者・深澤も現在大きな異論はないのであるが，ただ山梨県内の新聞紙上をあたった限りでは，3 月 15 日の株価大暴落に先立って，山梨県の内外では，あるいは全国的にも，生糸価格・絹織物の価格の暴落が見られる．例えば，「生糸暴落／買い物途絶す」(『山梨日日新聞』1920 年 2 月 7 日)，「定期糸復暴落」(『山梨日日新聞』1920 年 2 月 8 日)，「上野原町の機業失望／織出せば損失ありとて／市場出荷少し」(『山梨日日新聞』1920 年 2 月 10 日)，「生糸続落／四千円台割る」(『山梨日日新聞』1920 年 2 月 13 日)，「甲斐絹市況沈静」(『山梨日日新聞』1920 年 2 月 22 日)，等々.

つまりこれらの価格は本稿既述のように異常なまで高騰しすぎていて，既に限界を迎えていたようであり，1920 年 2 月にはその暴落がいくつか生じていた．銀行も既に早くも 1919 年の 12 月上旬ごろより資金の貸し付けに警戒を加え，貸し出しを手控えしていたようであって，これが投機界に影響を与え（『山梨日日新聞』1920 年 2 月 22 日，4 月 10 日)，以上を受けて 3 月 15 日に株価の暴落も始まり，この時の株価の大暴落が決定打となって，1920 年恐慌が展開していったと見るべきであろう.

この 1920 年 3 月の株価大暴落以後はそれが一層度を増し，資金の借り入れ側は困難が増幅していった．こうした投機熱からの反転，金融の手控え（代金回収)，糸況不振，大悲観の状況，これら一連の関連が以下の記事から理解できる.

> 前途暗黒の夏衣反物／地方金融界の恐慌／株の下落が祟つて
> ［前略］　殊に本県の如き所謂養蚕国に在つては地方金融の大源泉がそれに存するので、県下経済界の盛衰は一つに来る可き春蚕の結果に俟つ可きは毫も

疑ひを容るゝ能はざるところである、然るに戦後投機熱に浮かされた一般農家が這回の株式大暴落の一大痛棒を喰つて以来尚今日其の追敷に就いて頭痛鉢巻の最中である、搗てゝ加へて現今の金融界の手控へと糸況不振の為　買ひ桑をして雇人を入れての養蚕家にあつては到底十露盤の桁にのらぬ結果を生むは明らかであると云ふて大悲観の有様である　斯うなると地方の小売商人も今迄うか［うか］と拡張した品貸代金の回収と又問屋への支払ひとに忙しくなつて来るのは自然の数である　［中略］　此上は只管春蚕の好結果ならん事を祈るより外ないのである　（『山梨日日新聞』1920年4月3日.）

成金の花が散る！／県下投機熱冷却／又復株式の大暴落／吹始めた不景気風
［前略］　郡内方面から八王子青梅を初め機業家は青くなつて生産制限で織控をしてゐる　斯うした悪材料のみが続出しては如何に贔屓目に見ても物価逆行の時機到来とより思はれぬではないか、之れを見るも市内を初め郡部の流行性投機熱病者の苦悶が思ひやられる、買ひさいへすれば儲かると思つてゐた五ヶ年間の夢は散々に藪られた、斯うなると勢ひ銀行は貸出しに就いて目を光らせる、商家は今更のやうに品貸代金の膨張してゐるのに気がついて俄に取立て方針になれば之れが市から郡部へ順押しに押しかける　愈々売るよりも金を集める事に苦心しなければならぬ　物価は下落せぬ訳には行かぬ、先第一に成金風を吹かせて居た連中から追い［追い］此の不景気風に荒く当てられて来る　［以下略］　（『山梨日日新聞』1920年4月9日.）

このようにまず株価の大暴落から，金融の手控えや糸況の不振となって，投機熱からの反転が生じ，これらによって養蚕や機業また農業を主体とした山梨県の基幹産業・主要産業が大きく落ち込んでいった．これが関連する産業にも波及し，県内の景気も大きく落ち込んでいったのである．それらの影響は様々な方面・産業に波及し展開していった．以下ではその波及と展開の状況を把握・確認していきたい．

## 3-2. 恐慌の展開

まず何といっても，繭・生糸・甲斐絹これらの価格の下落のほどを，改めて表3・4で確認しておきたい．すべて 1920 年の 3 月をピークに下落しているのであるが，生糸はおよそ 3 分の 1 に下落し，最もひどいのは甲府市の繭の価格で 6 分の 1 くらいにまで下落している．あるいは 1920 年 3 月までの高騰が異常であったとも言えるのだが．

各産業の状況を見ていくと，上記示したように今までの高値に目を付けて，山林・田畑を売って力職機を据え付けた農家もいたほどであった機業の甲斐絹では，以下のとおりである．織り出しは中止という同業者組合の決定がなされていくのである．

> 不景気来る！不景気来る！／甲斐絹は織出中止／郡内機屋の大恐慌／織れば織るだけ損
>
> ［前略］　頃日来の不景気風の襲来には流石に今迄が今迄だけに郡内の甲斐絹も大影響を受けて、七日の谷村町の市日に於ける状態と来ては実にお話にならぬみじめさで取引絶無といふ有様で　原料糸よりも金五円の引込をさへ生ずるやうになつたが　それでも買手はなく人気も一層沈滞した、此の無前の大暴落に対し同地の仲買業者一同は七日午後から甲斐絹同業組合楼上に集まつて種々善後策を講じた結果　当分の間製織を中止して成行を見やうといふ事となつた、これは織れば織るだけ損をするので一切製織を見合わせやうといふに協議一決下ので、［中略］　近年になつて山や畑を売つて力織機を据ゑつけて俄機屋になつたといふものが多く中にも後者の恐慌は大したもので今更後悔したものも少なくないとの事である　［以下略］（『山梨日日新聞』1920 年 4 月 10 日．傍点は原文．）

この後には南北都留郡の同業者は全部が休業することを決め，これによって約 2,000 人の職工が事実上の失業となった（『山梨日日新聞』1920 年 4 月 20 日）．またその後にも 11 月 30 日から翌年の 2 月 15 日までの間，操業短縮・休業を決めたため，工女の失業問題が生じている（『山梨日日新聞』1920 年 11 月 13 日）．

こうした休業・失業問題のほかにも，銀行の貸し出し警戒から金融逼迫となり，この金融逼迫は農家が必要とする肥料資金の融通に大きな障害となっていった（『山梨日日新聞』1920年4月10日）．甲府市の呉服店では金纏めの手段として，投げ売りが何度も生じている（『山梨日日新聞』1920年4月25日，6月10日，8月2日）．養蚕家ではこれ以前の段階で糸価のさらなる高騰を見込んで，高い人夫賃や高価な肥料を惜しげもなく使用して養蚕の時期を待ったのだが，上記のように繭の価格は大幅に下落し，結局は青息吐息の状況と伝えられている（『山梨日日新聞』1920年4月26日）．更に悪いことに，蚕の食する桑がこの時期（4月22・23日）遅れた霜害に遭遇してしまったのである（『山梨日日新聞』1920年4月26日）．これによって期待されていた春蚕は，餌不足で品質不良や産出の低下が生じた（『山梨日日新聞』1920年6月3日）．このほかにも，「不景気が祟つて宿屋が閑散」との記事も見られる（『山梨日日新聞』1920年6月22日）．また同様に，特に甲府市で行なわれていた市民の内職としての座繰製糸も，不景気と生糸価格の低下のため，注文がなくなるか，賃金・価格の低下に見舞われた（『山梨日日新聞』1920年8月20日）．

このように広範囲で恐慌の影響に見舞われたわけである．恐慌後の不況も長く続き，一時的には繭や生糸また絹織物で増産の動きは見られたものの，恐慌発生の1920年中もそして翌年の1921年も，市況は一般的に上記を受けて引続き不景気状態であった．

## 4．恐慌の影響とその後の展開

本恐慌はこのように発生し，進展・展開していったとして，ここからはこの恐慌での影響と，その後の展開で特徴的なものを取り上げて検討していきたい．山梨県での例を示していくが，全国的にもおおよそ大同小異のことと考えられる．

### 4-1．地主・小作人の関係悪化

本恐慌の影響とその後の展開，また本稿との関連で特徴的なものとすれば，新聞報道に依る限りでも，1-1で示した地主と小作人の関係，これが悪化し，さら

には小作争議が増加するようになってきた点である．この件についてはあえて新聞報道に依らずとも，既に先行研究からも十分指摘されているところである．永原ほか（1972）の 15 頁に依れば，山梨県下における小作争議の件数は 1919 年に 3 件だったものが，1920 年には 11 件，1921 年には 15 件と増加し，7 頁ではその後年を経るに従ってさらに増加していくのが明確である．（ただこの数値について，細かいものまで含めると，実際はもっと多かったのではと推測される．その実態に関しては本誌の次号・次々号で詳述．）

本恐慌との関連で地主・小作人の関係が悪化していく要因を追究していくとすれば，何と言っても本恐慌から受けた農家・農村また小作農・自小作農のダメージがまず挙げられる．今まで示してきたことからも類推できようが，大戦景気や戦後ブームを受けて，絹織物など主要製品の高騰を目当てに，先祖伝来の田畑を売りに出してまで力職機を購入して俄機屋になった農家までいたのであった．しかしながら 1920 年の 3 月以降は主要製品の価格が大幅に急落し，さらにその後も不況に見舞われていったのであるから，関係者の損失等々は想像に難くない．そして本稿 1-1 で示してきたように本山梨県の産業基盤はこの時点で農業・農村にあったのであるから，このため本恐慌とその後の影響は必然的に農家・農村に収斂してくるわけである．あるいはまた逆に言って，問題の源流はそこに求められ，そこから以下見るように問題が湧出してくるわけである．さらに加えて，その農村における農業労働，そこから得られる農業生産物の取得様式の関係と状況に関しては，当時の農村には地主・小作関係が構造的に存在していたため，問題はここに集約・特筆されてくることとなる．これら一連の因果関係はまさに一体となっているのであって，「さもありなん」と言うべきところでもあろう．

こうした農村・農民の恐慌後の経済的苦境に加えて，このほかに小作争議の発生が急拡大していく要因としては，当時の農村や農民・小作人の中で，彼らの考え・思想・意識の変化があった．ロシア 11 月革命や米騒動を受けて，マルクス主義的な思想意識や行動様式が，新聞・雑誌をはじめとするマスコミから盛んに展開されて噴出していたのである．農村・農民においても，これらの影響を受け，またある者は感化されていた．（これらに関して山梨県の具体的状況は，特に深澤〔2023a, b〕を参照．）こうした当時の農村・農民・小作人の考え・思想・意

識の変化に関して，新聞紙上では以下見ていくように，一般的に地主から受ける小作人の過酷な冷遇状況や悲哀を記し，小作人への同情に傾いている主張が多い．

問題は無論農村だけでなく，都市において当時ストライキが多発するなど賃労働対資本の確執も存在し，それは全国的に拡大していた．ただ本稿1-1で確認してきたとおり，この当時の山梨県は農業経済に主体を置いた経済構造であったため，（以下確認するような）新聞記事を取ってみても，都市・甲府市などでの工場の紛擾・騒動よりも，農村における問題の方が多々取り上げて示されているわけである．例えば1920年から1921年上半期までの例として，『山梨日日新聞』に限ってみても以下の記事が確認できる．

「益々悪化さるる地主対小作農／当局も法律制定計画／融和せねば両者の損」（『山梨日日新聞』1920年8月30日）．

「地主対小作人の関係が段々悪化する／双方の妥協譲歩が必要／小作組合悪用は考へ物」（『山梨日日新聞』1920年11月12日）．

「論説／小作人開放問題／活かさず殺さず主義の廃止」（『山梨日日新聞』1920年11月17日）．

「社説／農村問題の解決／政府の中農保護政策」（『山梨日日新聞』1920年11月25日）．

「年末迫つて農家の苦しさは格別／売る米は莫迦に安く／買ふ物は何れも高い」（『山梨日日新聞』1920年12月4日）．

「滅び行く県下の自作農／如何にして救済すべきか」（『山梨日日新聞』1921年5月2日）．

「小作二千万人の死活問題／地主対小作人関係の改善／小作制度調査会の方針」（『山梨日日新聞』1921年5月14日）．

こうした記事である．詳しい引用は控えておくが，表題だけ見ても農家・農村の苦境，また地主・小作人の関係悪化のほどが知れよう．これらの記事からはほぼおおよそ，上記のように小作農の過酷な状況に同情する声が聞かされている．

## 4-2. 1920・1921 年の小作争議ほか

4-1 で確認した地主・小作人の関係の悪化は，特に 1921 年になるとさらに農村における実際の争議や紛争となって進展していった．もとより農村における小作争議はこれより以前から生じていたのであるが，この頃になると新聞紙上でかなり詳しい状況が記されてくる．1920・1921 年において生じたいくつかの事例を，『山梨日日新聞』から示していくと以下のとおりである．（以下でも述べるが，次の①②の小作争議に関しては，史料的価値のほかに，この後に生じて来る 1920 年代の一連の小作争議との関連で極めて重要である．そのため①②の小作争議の詳細に関しては本誌次号で示していくとして，ここ本稿では概略を示しておく．それによって今までの好景気と 1920 年恐慌の状況，そしてその後の農村における変化に関して，さらなる認識・確認ができていくためである．）

**①東八代郡豊富村大字関原（地主・I 氏対小作人 160 余人）の事例**

第一の事例として豊富村（現在の中央市）で生じたものを取り上げていく（以下『山梨日日新聞』1921 年 2 月 7 日～ 10 日「地主対小作問題／地主側は何所まで目覚めて来たか」より）．地主にあたる I 氏は豊富村のみならず東八代郡西部の屈指の資産家で，50 余町歩の田畑を有し，小作人は 160 余人ということである．

これを取り上げている書き出しは以下のとおりであって，まず上記当時の農村での考え・思想・意識の変化のほどが知れる．

> 国民の思想が著しく変化してきた。独り都会地計りではない農村にまで及んでゐる。

また既述の大戦景気・戦後ブームでの好況と，1920 年恐慌からの反動とその後の苦境のほど，小作料の引下問題とその紛擾のほどについては以下のとおりである．

> 大正七年［1918 年］より九年［1920 年］春に掛けての経済界の好況は地主に幸して小作料の如き引上げは連発され　七年［1918 年］に三割、八年［1919

年］に三割、九年［1920年］に五割と累進的に増加して目玉の飛び出る様な高ひ小作料になつて来た、左れど当時糸価五千円に近く、米は一俵二十四五円といふ破格時代であつたので小作人の威勢も素ばらしく　小作料など何程にならうと眼中に措かない有様で　仰しやり次第にハイ［ハイ］と応じてゐた、所で昨年［1920年］三月の俄然たる財界の大変動は彼等を奈落の底に突落した、次で来るべきは小作料の引下問題である、左れど一度嘗めた甘味は容易に忘らるる筈がない、地主［I］氏は小作人が手を替へ品を替へての哀訴嘆願も馬耳東風と聞流して温情のある返事を与へない、益濠を深くし、塀を高くして、敵を一歩も近付けまいとする、斯くて一年は紛々擾々たる中に過ぎた

このようにして1920年恐慌以来紛擾の後，埒があかないまま一年が過ぎようとする中，小作人側は数回の寄り合いを催しながら，結局組合を組織して団結し，頑固な地主に対抗するほかに道はないと決定．この後，彼らが組織した「農業組合」による考究の文書要求七か条を地主に提出している．

しかるに地主側はその一か条も認めずに，頑としてこれを退け，逆に一層督促を厳にし，小作料全部の支払いを要求し，さらにそれができない場合は相当の手続きに及ぶとの談判を持ち込んで即答を促した．このように地主が妥協せず，話し合いにも応じない態度に小作人側は憤慨し，結局のところ，この上は地主との関係を絶ち，以後一人たりとも地主I氏の田畑を耕作しない誓約を結び，互いに金策をして延滞利子等々も支払い，きれいに全部を皆済し，ここに全く両者間の関係を絶ったのである．

これが豊富村の例である．（この豊富村の一件は，地主側の小作証書，また小作人側の要求文書が残っているため，当時の様子・状況を知るべき史料的な価値も高いと考え，史料詳解を含めた別稿を本誌次号で示していく．）

**②東山梨郡七里村下於曾の事例**

同年の1921年の6月には七里村（現在甲州市）下小曾で騒動が生じている．（以下『山梨日日新聞』1921年6月13日「七里下小曾小作組合で小作料の標準を定

め／地主側に交渉したが拒絶／組合悪用不可と有力者語る」, 1921 年 6 月 18 日「本県に嚆矢の純小作組合の組織／地主側は之を承認せず」より.）やはり本稿上記指摘した内容として，以下の一文が冒頭に記されている.

今後の農村問題として最も注意を払ふべきは地主小作人問題なる

やはりこの 1920 年恐慌当時，農村における最大なる問題は地主と小作人の問題であったことが知れる．その七里村下小曾における一件は次のとおりであった.

かつて山梨県においては純然たる小作人の組合はほとんど一つもなかった．同地の小作農が地主に利益を壟断され，生活の安定を得ていないとして，1921 年の 1 月に 70 名くらいの小作人が団結して小作組合を組織し，地主と小作料問題に関して対峙した.

しかし結局のところ地主側は，小作組合の代表者に組合の設立を承認しない，また小作人の委任事項に対しても交渉に応じない，さらに入付そのほかの関係については従来の如く問題を解決すべしと，要求をはねつけるという態度であった．さらに「絶対に組合の要求を容るゝ能はずとして拒絶」したのである.

この後の状況については，同紙では 12 月頃に再び記事が見られるが，状況が進展しない様子が伺える.

**③そのほかの事例**

さらに驚くことに，この 1921 年の秋になると，小作争議あるいは争議にならないまでも小作人による陳情や要求を含めた騒動・行動が頻発するようになってきた．列挙すると次のとおりである．以下，各郡・町村・区（『山梨日日新聞』の月．日）で示していく.

南都留郡谷村町・三吉村・開地村・禾生村・東桂村・宝村（10.22, 10.29）
北巨摩郡秋田村（11.2），朝神村浅尾区・同村御令平組・同村新田区・日野春村井渋沢区・甲村（11.7），中田村（11.28, 12.5, 12.21），竹里村牧の原区・

若神子村新町・穴山村の各部落・日野春村塚川区・黒沢区甲村（12.4）
東山梨郡七里村下荻原区（11.3），後屋敷村（12.3），休息村（12.16）
東八代郡御代咲村（12.12），上曽根村（12.25）
中巨摩郡鏡中条村（12.19）

先にいくつか示したように，この当時，農村・農民・小作人には思想・考え方の変化があった．そして本稿で対象とした 1920 年恐慌それ自体とその後の彼らの苦境，また特に 1921 年の秋は不作だったことも影響している．そのため小作人が小作料の引下を求めて，実際の要求や行動を起こしていった．こうした要因と行動は解るとしても，しかし山梨県下でここまで広域に，そして数を増していったことには驚かされるところである．こうした現象と状況は他に触発されたある種の流行であるかのような，あるいはまた小作人の要求がこの時代において沸騰するかのように噴出してきたような感がある．

この後状況がどのように展開し，そしてどのように推移していったのか，その詳細なる論述分析については，筆者・深澤の本誌次号以降の課題としておく．ここではこれら各村々の争議の結果だけでもひとまず示しておくとすれば，円満に解決したものもあれば，そうでなく上記①②の事例に顕著なように，紛糾したものも多々あったのである．

## 4-3．昭和恐慌（1930 年～）との類似性

識者にはもうすでにお解かりのことと思われるが，こうした恐慌現象での農村・農民の苦境，そして農村での小作争議の頻発・多発，このような因果関係は，この後約 10 年後に訪れる昭和恐慌時のものと非常に類似しているのである．昭和恐慌時における農村・農民の苦境，そして農村での小作争議の頻発・多発，この関係性は何も昭和恐慌時において特徴・特有的なものであったのではなくて，すでに遡ること約 10 年前の本 1920 年恐慌後から見られるのである．このことが本稿今までの指摘から明確である．あるいはまた別な表現を用いれば，恐慌とその後の農村・農民の苦境，そして事態は農村における小作争議へと発展していく，これらの因果関係と推移・展開過程は，すでに 1920 年代初頭に胚胎してい

たわけであり，それが特に昭和恐慌時には顕著に現出していく．1920 年恐慌時はその先駆けでもあったわけである．

ともあれ，事態・状況はこの当時興隆していたマルクス主義的に解釈・把握するならば，階級構造的な矛盾が一層深化し，階級対立の状況をより一層激化させていたと把握できてくる[4]．今後事態・状況がどのように展開し発展していくのか，その詳しい把握と論述分析を上記のとおり筆者の本誌次号以降の課題としていく次第である．

**【参照文献】**

齋藤修・尾関学（2004）「第一次世界大戦前の山梨農村における消費の構造」（有泉貞夫編〔2004〕『山梨近代史論集』岩田書院）．

武田晴人（2002）「景気循環と経済政策」（石井寛治・原朗・武田晴人編者〔2002〕『日本経済史 3　両大戦間期』東京大学出版会）．

中込茂作編集兼発行者（1915）『山梨県西山梨郡清田村・国里村村是』清田村外一ケ村組合役場，一橋大学経済研究所社会科学統計情報センター所蔵．

永原慶二ほか（1972）『日本地主制の構成と段階』東京大学出版会．

橋本寿朗（1985）「景気循環」（大石嘉一郎編〔1985〕『日本帝国主義史Ⅰ』東京大学出版会）．

深澤竜人（2017a）「近代山梨県経済における企業設立状況と 1890 年恐慌の状況」『地域と社会』No.1.

――――（2017b）「近代山梨県経済における日清戦争後恐慌（1897-1901 年）の状況」『地域と社会』No.2.

――――（2018a）「近代山梨県経済における日露戦争後恐慌（1907 年～）の状況」『地域と社会』No.3.

――――（2018b）「近代山梨県経済における日露戦争後恐慌（1907 年～）後の農村不況の状況」『地域と社会』No.4.

――――（2019a）「近代山梨県経済における 1890 年恐慌の状況――各種史料を基に補充と再論――」『地域と社会』No.5.

[4]　これらに関しては，特に深澤（2022d, 2023a, b）を参照．

――― （2019b）「明治期における山梨県の細民生活の状態――1898（明治 31）年の調査を基に――」『地域と社会』No.6.
――― （2020）「日清戦争後恐慌期における山梨県の製糸産業と絹織物産業の状況」『経済学季報』立正大学経済学会，第 70 巻，第 1 号.
――― （2021b）「日露戦争後の地域・地方民の意識――山梨県に代表させて――」『経済学季報』立正大学経済学会，第 71 巻，第 1 号.
――― （2021c）「明治 40 年（1907 年）時点での山梨県の小作料に関して」『経済学季報』立正大学経済学会，第 71 巻，第 2 号.
――― （2021d）「日露戦争後恐慌期（1907 年～）における山梨県の製糸産業と絹織物産業の状況」『経済学季報』立正大学経済学会，第 71 巻，第 3 号.
――― （2022a）「日露戦争後から日韓併合時の地域・地方民の意識――山梨県に代表させて――」『経済学季報』立正大学経済学会，第 71 巻，第 4 号.
――― （2022b）「1910 年代における山梨県下での農家・農民の変容」『経済学季報』立正大学経済学会，第 72 巻，第 1 号.
――― （2022c）「ロシア革命・シベリア出兵に関する地方新聞の報道と主張――山梨県に代表させて――」『経済学季報』立正大学経済学会，第 72 巻，第 2 号.
――― （2022d）「山梨県における米騒動（1918 年）について」『経済学季報』立正大学経済学会，第 72 巻，第 3 号.
――― （2023a）「ロシア革命とマルクス主義・マルクス経済学の興隆との関連に関して――日本マルクス経済学史Ⅰ－③――」『山梨学院大学経営学論集』第 4 号.
――― （2023b）「1919 時点での山梨県における地主・小作人の関係について」『経済学季報』立正大学経済学会，第 72 巻，第 4 号.
山梨県中巨摩郡豊村役場編集兼発行所（1914）『山梨県中巨摩郡豊村村是調査書』一橋大学経済研究所社会科学統計情報センター所蔵.
『山梨県統計書』山梨県立図書館蔵，各年版.